

新学習指導要領解説連続講座「新しい生活科の姿」

第4回 幼小連携とスタートカリキュラム(2)

～スタートカリキュラムの意義と作成ポイント～

上越教育大学大学院 木村吉彦

はじめに

第3回で述べましたように、『小学校学習指導要領解説 生活編』で、「スタートカリキュラム」という用語が明記されました(p.45.)。幼児期の遊び中心の生活経験を踏まえた、合科的・関連的な学習の導入が低学年教育に必要であり、その中核を担うのが生活科であることが強調されたのです。生活科のもつ幼小連携上の重要性はこれからますます強調されていくでしょう。今回は、この「スタートカリキュラム」について、その定義や意味付け、そして作成のポイントについて述べたいと思います。

スタートカリキュラムとは

(『指導要領解説 生活編』pp.43～45.をもとに)

生活科は、教科の性格上、国語・音楽・図工など他教科等との関連が深く、今回の改訂においてもますますその必要性が強調されました。同時に他教科(国語・音楽・図工)の指導要領においても、「指導計画の作成と内容の取扱い」のなかで、「低学年における生活科との積極的な関連」が明示されました。生活科の学習指導に当たっては、低学年教育全体を視野に入れて、他教科等との関連を図りながら進めていくことがますます求められているのです。

今改訂において、「生活科の指導計画作成と内容の取扱い」の中に、「特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。」が付加され、この文言を基に『解説』「第4章 指導計画作成上の配慮事項」の(3)に、「スタートカリキュラムの編成」が新入児童の小学校生活への適応を促し、小1プロブレムなどの問題解決に効果的であるという見解が示されました。

以上のような、スタートカリキュラム作成の必要性を確認した上で、『解説』を基にしながら、ここでは、それぞれのキーワードについての木村なりの定義付けを行いたいと思います。合科的な指導と関連的な指導との区別については、『解説』の文言だけでは理解しにくいので、木村の思いきった見解を以下に書き出します。参考にしてください。

1. スタートカリキュラムとは

新入児童の入学直後約1ヶ月間において、児童が幼児期に体験してきた遊び的要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両方を組み合わせた、合科的・関連的な学習プログラムのことです。とりわけ、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導は、児童に「明日も学校に来たい」という意欲をかき立て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらす、新入児童の小学校へのスムーズな「適応」を促してくれることが期待されます。

2. 合科的な指導とは

学習のねらいとして、抽象度の高い「方向目標」(育てたい子どもの全体像を示した教育目標。これは同時に、どの方向に子どもを育てたいのかを明示した教育目標でもあります。)を定め、その目標を達成するために、遊び的要素の強い活動や教科にも連動するような活動を取り入れ、児童の登校意欲や学習意欲を高めるような指導のことです。

例えば、「がっこうだいすき」という単元名にし、目標を「学校が大好きになり、明日も学校に来たいと思える子ども」を育てることと設定します。実際の活動の中には、例えば、学校探検(生活科)・自己紹介(国語)・友だち何人?(算数)・校歌を歌おう(音楽)・自画像で自己紹介(図工)などを取り入れ、やがて様々な教科学習に結びつく活動を遊びながら展開していくことが考えられます。スタートカリキュラムは、「育てたい子ども像＝活動を中心とした学習全体のねらい」が先にある合科的指導が相応しいと考えます。

生活科の持つ教科目標の抽象度の高さ(自立への基礎を養う)と学習の自由度の大きさ(学習の大枠は教師が決めるが具体的な活動内容は子どもが決める)が、スタートカリキュラムをより効果的にするのです。スタートカリキュラムが生活科を中核とした合科的な指導計画に基づくことが望ましいという理由は、ここにあるのです。

3. 関連的な指導とは

ある一つの教科の目標を中心に据え、その目標を達成するために他教科の活動を取り入れて行う学習指導プログラムのことです。例えば、生活科でアサガオ栽培に取り組み、「アサガオさんとともだち」という単元を設定し、「アサガオに強い愛着を持ち『ぼく・わたしのアサガオ』という意識を高める」という目標を設定したとします。アサガオに愛着を持たせるために、学習カードに絵や作文をかく活動(図工・国語)、アサガオの花や種の数进行数える活動(算数)、アサガオのつるでリースを作る活動(図工。このとき、まだ緑が残っているので切りたくないという子が出る→命の問題＝道徳)などを関連させることで、生活科のねらい(継続的な栽培活動を通してアサガオの生長と自分自身の成長に気付く)をより確実に達成することが可能となります。生活科の日常的・継続的な活動を他教科学習の素材とすることで、様々な側面からの表現力を身に付けることができるのです。これは、低学年教育全体として取り入れたい学習スタイルであると考えます。「題材は生活で、表現は他教科で」学習することで、様々な教科との関連も重要であるという生活科の教科特性を象徴するのが関連的な指導です。合科的指導・関連的な指導の両方の活用によって、新入児童の教科学習への接続がよりスムーズに果たされます。

スタートカリキュラムの意義と作成のポイント

1. 小1プロブレムの克服

子どもにとっては、遊び中心の生活から教科学習中心の生活へと生活スタイルが変化することは、かなり大きな「段差」です。これまでは、自分で決めた課題(自分のしたい遊び)を自分で達成する(自分の力で実現する)生活が中心でしたが、教科学習では外から来る課題に自分がどのように対処するのか(知識・技能の習得)が問われるからです。

それと同時に、自力での登・下校、時間割に基づく生活、施設・設備の違い等々、子ども目線からすれば多くの「段差」が観られます。そのとき、これまで経験してきた「遊

び」の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは、子どもにとって「小学校でもこれまでやってきたことが通用するのだ」という自信が持てるきっかけになります。これが、スムーズな「適応」を生み出すというスタートカリキュラムの第一の意義です。

2. 子どもも安心・保護者も安心・先生も安心...み - んな安心プログラム

1. で述べたことは、子どもにとっての安心プログラムです。それに加え、全校体制でスタートカリキュラムに臨むことで、保護者の皆さんや担任の先生も安心して新入児童と関わることができます。

保護者も安心：1週間ごとの教育目標が週の初めにあらかじめ示され、かつ、明日の持ち物や活動予定を知らせてもらうことで、保護者の皆さんは安心して子どもたちを学校に送り出すことができます。特に、1週間の予定表を事前配布され、各教科の配当時数

等が示されていますと、「ちゃんと勉強しているんだ」と喜んでくれます。全校を挙げて、保護者に説明責任を果たすことで、保護者からの理解と協力が得られるのです。

先生も安心：担任のみならず、入学後約1ヶ月間は管理職の先生、養護教諭の先生、特別支援の先生、また保護者によるボランティアサポーター等、様々なおとなの皆さんに新入児童を見守ってもらいます。そうすることで、子ども達は安心感と安定感を持つことができます。担任の先生も焦らず、じっくり自分の担任する子ども達の様子（実態）を見取ることができます。たった一人で30人もの新入児童を世話することの大変さを考えますと、複数教員での世話は、担任に心の余裕を与えてくれます。それによって、「子ども理解を第一の課題とする」低学年教育のあるべき姿を実感することができます。

3. 小学校生活に必要な生活習慣形成

小1プロブレムなどでも論じられていますが、学校生活に必要な生活習慣（ルール遵守の精神や規範意識）を身に付けなくては、新入児童のその後の小学校生活に支障をきたしてしまいます。既に述べたように、遊び的要素の多い活動から小学校生活に入りますので、楽しみながら相手意識をもって「先生との接し方」「友達との接し方」を学ぶことができます。また、生活科の学校探検などを学習活動の中核にする場合が多いので、「廊下の歩き方」や「おとなへのあいさつの仕方」「自分の紹介（自己主張）の仕方」等々、人間関係づくりの基礎・基本を学ぶことができます。多くの学校では、「ソーシャルスキルトレーニング」をスタートカリキュラムに取り入れていると思いますが、楽しみながら、かつ、達成感（自己充実感や自己肯定感）を経験しながら、社会性を身に付けるように指導してください。

おわりに

今回紹介しましたスタートカリキュラムの内容（具体例）の多くは、仙台市のスタートカリキュラム実践校から学んだものです。仙台市では、今、スタートカリキュラム作成要項を全市を挙げて作成中です。そして、『仙台市スタートカリキュラム作成要項(仮)』を今年中に全国出版する予定です。スタートカリキュラムの理論的裏付け、並びに実践例については、仙台市教育委員会発の全国に先駆けたメッセージにご期待下さい。

